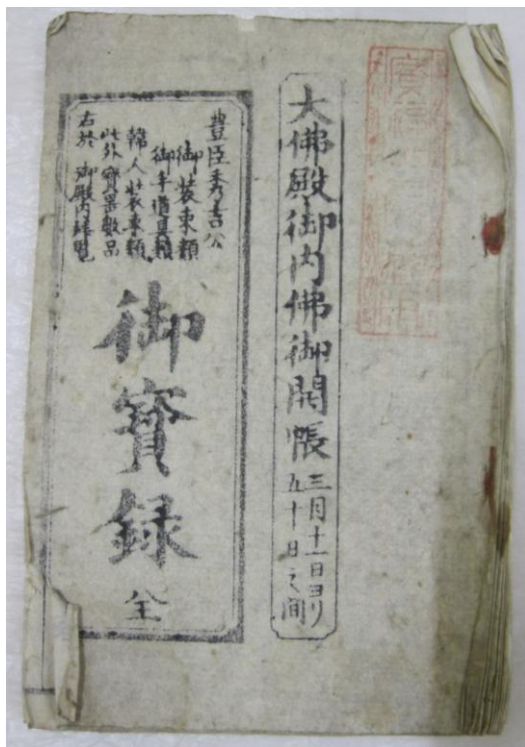


されたと指摘する。郡家に本史料が伝来したのも、おそらく当家の人物が実際に御開帳に参詣したのだろう。

◆史料翻刻『御開帳御宝録帳（大仏殿御内仏御開帳御宝録帳）』



【写真①】『御開帳御宝録帳』表紙

【表紙】

「廣福王廟藏版」(朱印)

大仏殿御内仏御開帳

三月十一日ヨリ
五十一日之間

豊臣秀吉公

御装束類

御手道具類

韓人装束類

此外宝器数品

右於 御殿内拝覽

御宝録 全

らくちんはうくはくたうだいかつてん そのなま しやうむくはうていなんと れい じゆん とよとみひてよしやう
洛東方廣寺大仏殿ハ、久代ノ聖武皇帝南都の例に准じて、豊臣秀吉公
しかい さつしやう しづめ
四海の騷擾をノ謚たまひ、天正十六年に列国の諸侯に命し、僅一歳の間
にノ創建なさしめ給ふ、今時天保三年まで都而式百四十五年ノにいたる、
しか くはんせい うま らいくハ ため りいせんたい ふつてん ろうもん くはひらう
然るに寛政十年のとし、雷火の為に 御尊体および仏殿・楼門・廻廊に
いたるまで 忽ち灰燼とハなりぬ、都鄙貴賤ノ歎哭限りなく、再造をは
かるの力もたるみ、勸進を催さんのノ勇もなくして空しく三十余年の
せいさう すき ごしゆさう もやふし つき けいちやう くはんせい
早急を過けるところにノ此度御修造の御催 これあるに就て、慶長・寛政
れうど しやう さい いんじん もよふ いんかん なげきかぎ
兩度の焼ノ災にもつつかなかく残りまします眉間籠の釈迦如来、三天ノ
かづい だいでんとう かりらう ごかいらう しゃかによひつ さんてん
合体の大黒天等を大仏殿飯堂におゐて御開廊あらせられノ太閤秀吉公の
御装束并御手道具類、あるひハ韓人のノ衣装のたぐひは、御殿内におゐ
て拝覽御赦免あり、ノ日限ハ三月十一日より始めて五十日の間なり、將又御
ばうき かずく はいけん およ もと とよくにしやとう きうせき とハ しようじん
宝器ノ数々ありといへとも、御文庫に蔵あつて、御大切の品なれば、ノ
その大抵を拝見に逮ふ、原当山ハ豊国社頭の旧蹟なノれば、都鄙の庶人に
いたるまで 幸に参 殿し、此御宝物ノノ目録をもつて、其名品の数々を
つしん はいわん
謹て拝睦に及ふへき者也、

天保三歳辰三月

御宝録

九点を以て御間をわから
其御間毎の宝器をしるす

○麝香之御間

狩野永徳御筆

豊国三十六歌仙 古筆名画

○花鳥之御間

狩野永徳筆

頼朝卿之文	よりともけうのふみ	一幅	定家卿之文	さだいえけうのふみ	一幅
定家卿色紙	ていかきようしきし	一幅	慈鎮之文	じちん	一幅
寂蓮 催馬楽	じやくれん	一幅	郭公詠 艸	かくきかういのゑいさう 小堀遠州 松花堂 兩筆一幅	一幅
一休 自画讃	いつきう	一幅	山水之図 右法眼	さんすいのづ 二幅対	二幅対
富士之図 雪村	ふじ	一幅	梅 鶯之図 松花堂	うめにひよどり 松花堂	一幅
牛馬之図 探幽	きうば	一幅	盆石之図 松花堂	ぼんせき 松花堂	一幅
梨之図 松花堂	なし	一幅	山水之図 啓書紀	さんすい 啓書紀	一幅
一虎兩龍之図	いつこれつじやく 唐画 不知筆者	一幅	温州雁山之図	おんしうがんざん 唐画 不知筆者	一幅
山水之図 載文進	さんすい	一幅	鷹白鳥之図 湯静仲	たかはてう 湯静仲	一幅
漁船之図 宗夏圭	ぎよせん	一幅	竹之図 夏仲照	たけ 夏仲照	一幅
蘆雁之図 呂記	あしにかり	一幅	山水之図 文彰	さんすい 文彰	一幅
花鳥之図 虚窓 三幅対	くハとう 虚窓	三幅対	岳陽樓之図 唐寅 二幅対	岳陽樓 紫羅樓 唐寅	二幅対
山水之図 文衡山 自画讃	さんすい	一幅	竹之図 壇芝瑞	たけ 壇芝瑞	一幅
東波之図 唐画 不知筆者	とうは	一幅	山水之図 用文	山水之図 用文	一幅

能はず
此外書画の類数多し、折々掛替らる、／因茲こと／／記す事

○宮島之御間 狩野永徳筆

韓人装束類	かんしんしやうぞく	一領
赤地金欄牡丹唐草	あかぢきんらんぼたんからくさ	一領
赤地金紋紗雲浮紋	あかぢきんもんしやくものうきもん	一領
背二唐獅子	せにからしし	一領
背二鳳凰	ほうわう	一領

牡丹唐草	ぼたんからくさ	背二麒麟	きりん	一領
雲水ノ地紋	うんすい ちもん	背二麒麟	きりん	一領
赤地之地無紹	あかぢのぢむる	襟白	えり	一領
同	同	背二金欄之龍	きんらんのれう	一領
同	同	背二雲龍	うんりやう	一領
同	同	背二龍	りやう	一領
同	同	背二飛龍	ひりやう	一領
同	同	襟白	えり	二領
萌黄緞子雲水地紋	もへぎどんすうんすいぢもん	襟赤	えり	一領
白地紗	しろぢのしや	襟赤	えり	一領
赤地紗	あかぢのしや	襟赤	えり	一領
黒 紹	くろ	襟白	えり	一領
浅黄縮緬	あさぎぢりめん	襟赤	えり	一領
薄柿無紋紗	うすがきむもんしや	襟赤	えり	一領
萌黄金欄牡丹唐草	もへぎきんらんぼたんからくさ	亀紋白 麒麟鳳凰	かめもん せきりん ほうおう	一領
緞子牡丹唐草	どんすぼたんからくさ	亀紋白 麒麟鳳凰	かめもん せきりん ほうおう	一領
毛織脚絆	けおりのきまはん	足	あし	二足
花人履	くハじんのかつ	足	あし	二足
朝鮮国王奉書 袋	ちやうせんこくわうほうしよ みづぎものもくろく	紫朱金力ガリ金	むらさきしゆきん	一領
朝鮮国王貢物目錄	ちやうせんこくわうほうしよ			
唐櫃 菊桐蒔絵	からびつ きくきりまきゑ			二合

○競馬之御間 五月五日賀茂競馬之図 狩野古右近筆

御茶入 唐物小肩衝銘 忘草 袋 永観堂切三斎緞子

一軸添 小堀宗甫 江月和尚 両筆 白地墨織 漢 東

御香合 二 鎌倉彫 赤絵隅入

御茶碗 伊良保

御茶入 漢広口 小堀遠州書付

御茶杓 小堀宗甫銘 まかき 共筒

同 片桐石州 共筒

御茶碗 爺々屋

同 黒楽

同 古萩銘 宝市

同 大徳寺五黒

御釜 兜形定雅作

同 天明丸

御水指 志野織部

御水次 七宝

御香炉 花車 後藤祐乗作 金銀細工

歌仙重御硯箱 時代蒔絵

御文台 時代蒔絵

御太刀 菊一文字 一腰

御一延箱 時代蒔絵

御見台 同断

御黒棚 同断 菓草模様

長柄御銚子 銀 一枝

御袖香炉 金銀細工 紫陽花形

御硯箱 壺

御硯石 一面

芦屋釜下絵 一卷 春林既醉之図 唐画 一卷

内裏御歌合 一卷 輞川之図 明人画 一卷

花虫之図 唐画 一卷

○天橋立之御間 狩野永徳筆

秀吉公御手道具類

蓮華王壺 袋 前田徳善院文添

唐金御水指 唐物

御香合 東山殿御物 時代蒔絵

天目御茶碗 台 青貝

御茶碗 高麗焼 銘 瓢

御香合 布袋名物

御茶碗 印渡

同 黒楽 長次郎作

御茶入	藤四郎作 袋	天燈 逢坂 高野切 焼切	一
同	唐物 銘 難波		一
御茶杓	紹鷗 片桐石州之書あり		共筒
御茶杓	利休居士作 片桐石州之書あり		共筒
御水指	南蛮陶器		一
礎御花生	青磁カスガイ打		一
御釜	阿弥陀洞 与二郎作		一
盆石	銘 雄ノ山		一
御硯箱	梨子地菊 墨入硯梅竹		一
御文台	菊薄 蒔絵		一
御硯箱	同		一
御揚弓	延付 下鉾笹ノ丸蒔絵		一
御杖	黒漆菊桐蒔絵 赤地綿袋入		一
扶竹鳩御杖	唐土より渡る		一
御膳 一式	膳碗 飯櫃 湯次 杓子 塗箸 菓子椀	何れも黒漆之菊桐御紋 あるひハ秋草の蒔絵あり	一
唐鏡	一面		一
御櫛箱	梨子地菊桐蒔絵 小鏡毛抜 髪水入 三摺		一
隅赤御箱	菊桐蒔絵		一
御太刀掛	黒漆菊桐蒔絵		一

御手拭掛	菊桐蒔絵	一
瓢箪	織田信長方 拜領	二
○春日之御間	狩野古右京筆	
秀吉公御装束類		
御直衣	小葵 裏浅黄	二領
同	浮線綾 裏黒	一領
同	花菱	一領
同	二藍	一領
御袍	雲立涌	一領
御襲	赤地菱紋	一領
御裾	白地浮線綾 裏黒	一領
御表袴	八藤丸 表赤絹	一領
御下袴	赤地桐唐草 下裏白地小葵	一領
御五重襲	赤地亀甲白鶴紋	一領
御浮織		
御笏		一本
御檜扇		一握
御鼻紙	半紙 楊枝	
御床		
後陽成院御宸筆		
豊国御額		

前置唐物 一卓

香炉瑪瑙 穗屋黄金

同勅作

瘦女之面 帛紗 天竺切

秀吉公御文

豊国法衆百首和歌短冊

秀頼公 紹巴 玄以 盛長 道阿

雲龍院宮 其外数人の筆

軍配団

梅花模様真珠珊瑚珠細工

羽柴筑前守制札

同 甲冑

同 鞍

○野牛之御間 狩野永徳筆

大仏供養之御節導師者

御袈裟 唐織

同 五 鈷 黄金

幄鬼面

大般若経 伝教大師御筆

五大尊 獅子吼院宮御筆

大般若経 安倍小水鷹筆

十六羅漢

明人画 周朝賛

同 御数珠 珊瑚

同 大幡

金毘論 慈覚大師御筆

法華経 元三大師御筆

法語 恵心僧都御筆

往生講式 行尹卿筆

台嶺之図

一卷

古筆手鑑 式通

○吉野之御間 狩野古右近筆

○耕作之御間 狩野松栄筆

○鶴之御間 狩野古右近筆

庭中之奇跡

雲龍金燈籠 銘 天下 一釜大工与次郎実久辨 之庭中両所とあり

瑪瑙手水鉢

積翠園 唐筆之類あり

嗟呼亭 米元章之類有

君子(木偏に射) 唐筆之類あり

水面亭

普賢堂

此外庭中名区名器多し

○大仏殿飯堂

舍利宝塔

阿弥陀如来画像 獅子吼院宮御筆

如意輪観音画像

愛染荒神 画像

文殊菩薩

維摩筆

一幅

一幅

一幅

一幅

一基

御鎮守
○ 新日吉社
しんひよしのやしら

豊国大明神真影
とよくにたいめうしんしんまゐ

同御神号
ごしんごう
秀頼公八歳
御筆

御衣
きよぬ

御劍
きよけん

大額
おほがく

狛犬
こまぬいぬ

絵馬
ゑま

金燈籠
かなどうろう
奉納
片桐東市正一臣
同 主膳正貞隆
一対

三十六歌仙額
古筆
名画
楽人装束類
がくにんさうぞく

楽器類
がくき

已上

三大仏創建をめぐる二・三の考察

天正十四年（一五八六）四月に、秀吉は大仏殿の建立を計画し、文禄三年（一五九四）頃に完成した。大仏殿に関する研究では、三鬼清一郎氏が、大仏殿の造営費用を記録する、「大仏殿御算用事」を用い、作事における諸費用や職人編成、材木輸送などを詳細に検討され、大仏殿普請の実態を明らかにされた（6）。大仏の性格については、「豊臣家の氏寺として、国家鎮護とともに、先祖の供養と子孫の繁栄を祈願する場」とする。

一方、河内将芳氏は、秀吉の大仏に対する意識や、「大仏経堂」にて執行された千僧会を検討し、大仏を「秀吉やその政権にとってのプロパガンダ施設」と性格づける（7）。

従来、秀吉は東大寺大仏に替わる新たな大仏を京に造立しようとしたと指摘されてきた。『多聞院日記』（8）には、天正十四年七月二十一日に秀吉が奈良を訪れ、大仏の「堂ノタケ取以下被沙汰之」といい、天正十六年（一五八八）五月十九日には、奈良へ前田玄以と山口次左衛門を派遣し、「大仏ノ石スエ堀ヲ見ル処、大石五重大柱ノ下ニ重ヲ敷云々」とあり、東山大仏建立の「大供（工カ）指南」のために東大寺大仏殿の構造を調査し、



【写真②】京都国立博物館（新館）傍の方広寺石垣（南面）

新たな大仏殿普請に採用する意識が窺え、東大寺大仏から東山大仏への継承の一端が分かる（9）。

天正十六年六月十日には、「大納言殿」つまり豊臣秀長が、奈良の「仏士（師）」を召し連れて上洛した（10）。『太閤記』には、「奈良之大仏師宗貞法印、同弟宗印法眼」が大仏の造像を担当したとある。秀長が本尊造像のために召し連れて仏師と共通すると見て問題ないだろう。

また、東山大仏普請の直前に行った金峯山寺本尊の造像を、秀長の差配の元、奈良仏師宗貞・宗印が行っており（11）、秀長と奈良仏師との関連がうかがえる。大和・紀伊を領有する秀長にとって東山大仏普請は、奈良仏師の動員や、先例となる東大寺の存在、そして領内に良質な材木が豊富な点において、中心的な立場であったと考えられる。

ところが、天正十六年十二月に、ある事件が発生する。秀長が紀伊国大將として雑賀の城に入れた（吉川）平介が、熊野山の二万本もの材木を伐採して大坂へ輸送して売り払い、代金を過分に着服したという。東山大仏の建築資材など、材木の需要が多く、価格も高騰していたことが予想されるが、この一件を秀吉に知られ、「曲事」として捕縛され、十二月五日に西大寺にて平介は処刑された（12）。『多聞院日記』では、「不情不便ノ次第」と平介を同情する一方、「大納言殿天下ノ面目失儀也」と、秀長の監督責任を問題視する。この一件の根は深く、天正十七年正月には、「旧冬熊野木売」を理由に、秀吉は秀長との面会を拒否している。その後秀長は、淀城普請に取り掛かるが、大仏普請への関与が見られなくなる。

さて、文禄二年に完成した大仏殿の落慶法要は、秀吉生存中には執行されることなかった。秀吉死去の一年後、慶長四年四月には、秀吉を神と

して祀る豊国社が阿弥陀ヶ峯の麓に完成する。従来、注目されなかったが、豊国社へ向かう参道（豊国馬場）沿い、並びに周辺には、豊臣家家臣団の建立した寺院・屋敷群が立ち並んでいた。

『義演准后日記』（13）の慶長三年（一五九八）九月十一日条には、「同十二坊被建之」とあり、豊国社の社殿を建立中、「十二坊」の作事も並行して行われたことが分かる。『伊達成實記』には、「御門前は諸大名衆寺へ御立、思々の御普請」とあり、諸大名衆が各自で作事を行ったことが読み取れる。河内氏は、奈良県立美術館蔵『洛外図』より、豊国社楼門前の坊舎の内、所司代玄以の寺を例示されたが、具体的には分からないとした（14）。

『京都東山豊国神社古図』には、「石田治部少輔寺」・「長東大蔵寺」・「徳善院屋敷」・「青木紀伊守屋敷」・「堀監物寺」・「摂津守（小西）寺」、山中山城守（山中長俊建立の慈芳院カ）などが見られる（15）。各寺の実態を示す史料は乏しいが、黒田如水の寺は、慶長十年（一六〇五）に、板倉勝重の差配によって、豊国社の社僧・神龍院梵舜へ譲渡され（16）、青木紀伊守屋敷と台所は、慶長十三年六月に梵舜へ譲られたことが判明している（17）。なお、東山区慈芳院庵町にある、建仁寺の塔頭・慈芳院には、山中長俊画像が保存されている。豊国馬場から離れた位置にあり、豊国社一帯の豊臣家臣団の寺院配置や、その実態解明の上で注目される事例であろう。

史料上、「豊国内」や「豊国之寺」として登場する上記の寺院は、豊国社を中心として阿弥陀ヶ峯の麓一帯に広がり、秀吉の子・鶴松の菩提寺である祥雲寺などとともに、豊臣家並びにその家臣団の寺院が集合する空間を構成していた。三鬼氏が、方広寺を豊臣家の氏寺と性格付けされたように、豊臣家の氏寺や、氏神としての豊国社を中心として、豊臣家臣団らの名を冠した寺院（塔頭）が集合する、豊臣政権の精神的支柱となりうる空間であったと考えられる。同様の寺院配置が、他の地域においても形成されたことがあるのか、後に継承されるのか、今後検討を重ねたい。

四 おわりに

宝録帳前書には、方広寺について、「原当山ハ豊国社頭の旧跡」とあり、方広寺をも「豊国社頭」の内に含める意識が天保年間においても存在した。元和元年の豊国社廃社後、社殿は朽ちるにまかせ、京都の人々の記憶か

らも消えた豊国社であったが、天保三年御開帳の参詣者の多くが、豊国社の社宝や秀吉の手道具等を目にし、往時の姿を思い描いたことだろう。

「豊国寺」の実態や、秀頼による大仏再興など、豊臣・徳川の政権移行期における問題として注目すべき課題の一つであり、江戸時代初期に見られる豊国社の復興など、未解明の問題も多いが今後の課題としたい。

【註】

- (1) 河内将芳氏が指摘するように、方広寺の寺号は、江戸時代初期にあらわれ、秀吉が創建した大仏殿について、当時の記録には「大仏」や「東山大仏」と記述される（『秀吉の大仏造立』法蔵館、二〇〇八年）。また、『妙法院日記』元禄十六年（一七〇三）五月二十七日条には、「大仏殿号廣福寺」とある。
- (2) 高槻市立しろあと歴史館図録『高山右近の生涯』（二〇一三年）。
- (3) 『秀吉と京都—豊国神社社宝展』（監修 森谷尅久、編集 片岡肇、一九九八年）。
- (4) 芦原義行「豊国大明神の盛衰」（『龍谷日本史研究』三六、二〇一三年）。
- (5) 黒川真理恵「摺物にみる方広寺大仏殿開帳について」（『お茶の水音楽論集』九、二〇〇七年）。
- (6) 三鬼清一郎「方広寺大仏殿の造営に関する一考察」（『織豊期の国家と秩序』、青史出版、二〇一二年）。
- (7) 河内将芳『秀吉の大仏造立』（法蔵館、二〇〇八年）。
- (8) 『多聞院日記』天正十四年七月二十一日条。
- (9) 『多聞院日記』天正十六年五月十九日条。
- (10) 『多聞院日記』天正十六年六月十日条。
- (11) 和歌山県立博物館図録『木食応其』（二〇〇八年）。
- (12) 『多聞院日記』天正十六年十二月七日条。
- (13) 『義演准后日記』慶長三年九月十一日条。
- (14) 河内将芳『秀吉の大仏造立』（法蔵館、二〇〇八年）。
- (15) 原図は京都東山新日吉神社蔵だが、『舜旧記』二（史料纂集）に所収。
- (16) 『舜旧記』慶長十年五月十七日条。
- (17) 『舜旧記』慶長十三年六月十七日条。

高槻藩永井家の分限帳「御当古分限帳」について

西本 幸嗣

しろあとだより第六号（平成二十五年三月十六日発行）「高槻藩永井家の分限帳について（一）」で紹介・翻刻した「御当古分限帳」（しろあと歴史館所蔵）の積文の続きを掲載するものである。

三拾石拾人扶持	醫師	森 寿庵	六石	腕奉行	成合善兵衛
拾石三人扶持	針医	岡田 道休	六石	太鼓打	伊藤又助
拾五石三人扶持	■	岡野太左衛門	八石	左官	小崎長兵衛
八石五十三人扶持		中川庄右衛門	七石二人半	足軽目付	坂口武太夫
八石五十三人扶持		御台所払持方渡	七石	同	高屋十右衛門
拾貳石三人扶持	鉄砲薬奉行	久保田嘉右衛門	七石	同	宮田太兵衛
六石二人	同	山口源左衛門	七石	同	中山甚太夫
七石五十二人	針奉行	加々江佐左衛門	七石	同	三好金左衛門
八石三人	大指物方	神戸市左衛門	七石	同	岩井次郎兵衛
七石三人	革細工	佐藤長右衛門	七石	同	飯尾八右衛門
六石二人	同 右子	水野喜左衛門	七石	同	江原何右衛門
八石三人	塗師	水野喜右衛門	七石	同	片山市左衛門
八石三人	切角師	大西六右衛門	七石	同	南風仁兵衛
拾石四人	鉄砲細工	宇野与惣右衛門	七石	同	上崎喜右衛門
七石二人	指物細工	清水善吉	七石	同	和田庄左衛門
六石二人半	鉄奉行	羽田仁兵衛	七石	同	渡辺四郎左衛門
六石	同	川井五右衛門	七石	同	片葉作左衛門
六石	屋根ふき	伊藤新右衛門	七石	同	川嶋佐左衛門
六石	御鉄砲持	川村善兵衛	七石	同	宮崎吉兵衛
六石	同	下村文右衛門	七石	同	山田吉左衛門
八石五十三人	山廻り	平尾七兵衛	七石	同	熊田長左衛門
八石五十	山廻り	谷 太兵衛	七石	同	岡本善左衛門
八石二人	同	桑佐義左衛門	七石	同	川崎与太夫
	同	石村理左衛門	七石	同	大崎八兵衛
			七石	同	島根彦兵衛
			七石	同	日比治兵衛
			七石	同	宮崎三太夫
			七石	同	秀嶋九左衛門
			七石	同	■ 辺治左衛門
			七石	同	黒田七左衛門
			七石	同	南部権之助
			七石	同	松本金平

六石 二人扶持

同

小曾根吉左衛門

六石 同

同

伏見与兵衛

六石 同

同

中村六兵衛

六石 同

同

三ヶ山次兵衛

六石 同

同

三ヶ山惣左衛門

六石 同

同

三ヶ山太兵衛

六石 同

同

木村七左衛門

六石 同

同

三ヶ山理左衛門

六石 同

同

宮田長兵衛

同三石五斗

木挽

長右衛門

三石五斗

同

長助

同百拾五石式斗

御足輕小頭十六人分

御旗組小頭共

四拾七人

棒持方老人二三人扶持宛

御旗小頭御二式人扶持也

五百九拾五石三斗

御足輕三百拾人分

但、御旗共二六百式拾人扶持老人二

式人扶持宛二積り

一六拾石

同足輕組頭六人

五人ハ老人二五石ツツ、

其人ハ

粟生村

拾石也、岡与兵衛

五百四拾石

同足輕三百老人とも

老人八斗宛

老人八斗

丹州

法貴八兵衛

三百廿九斗三人扶持

中間頭

杉浦七郎右衛門

百七拾斗二人

同

松浦七右衛門

式百斗二人扶持

中間頭

坂本市平

百五十斗老人

同

藤兵衛

百五十斗

同

藤八

二百四拾四斗五分

同

弥左衛門

四石式十

御上台所仲中間

五郎八

四石

同

庄五郎

三石八十

同

孫作

三石

同

作藏

二拾六石

鷹犬引

拾三人老人二老人扶持

銀 二貫百五拾老斗六分

御馬口衆中間様式人小頭共

但、老人二銀百七拾九斗三分二一人扶持

銀 老貫七拾五斗八分

御道具持者六人老人扶持

老人前 百七拾九斗

銀 二貫百六十斗

御駕籠立者九人小頭共

但シ老人二銀式百四拾斗式人扶持

小頭三人

百目老人扶持

御草り衆老人

但外ニ 御中間之内より三人出ル

銀拾九貫九百目 御中間 百九拾九人

但、老人二銀百斗老人扶持

江戸参候節ハ、廿斗増被下

外、拾三人切米 御鷹犬引

中間

二口ノ式百拾式人

内

百廿四人

拾八人

拾式人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

七人

六人

三人

三人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

壹人

ノ式百七人 残而五人同扨二遣

米式百廿五石

但壹人ニ米壹石五斗とも

片棒持

百五十人

銀切符御小姓

八百六拾弍三人半

八百七拾弍四人半

七百七拾四弍二人半

七百七拾四弍三人半

六百八拾八弍同

六百八拾八弍同

六百四拾五弍二人半

五百拾六弍三人半

人数八人

銀ノ五貫七百六拾弍弍

銀切符御納戸

八百六拾弍三人

七百七拾四弍二人

八百拾七弍三人

七百七拾四弍同

七百七拾四弍同

式百五拾弍二人

八百拾七弍三人

人数六人

銀ノ四貫三百三拾五弍

式百五十弍一人

二百廿弍同

百五十弍同

百四十弍同

三百弍二人

式百五十弍同

片棒持

百五十人

栗嶋三四郎

石田数馬

小倉小伝次

梶川龜之助

堀内伊織

平塚友之助

服部作十郎

小川六之助

松井清六

柴田庄右衛門

村上半左衛門

藤林武右衛門

箕浦二郎兵衛

川村三左衛門

石塚長右衛門

大藪権兵衛

加藤六十郎

天野喜太郎

若林玄左

和田玄佐

江戸詰

御馬屋

御門定番

二ノ御丸御門番

同所掃除

つすへ 少丈竹林付

御亭番

納之番

下台所飯焚

三ノ丸門番

石塚長左衛門

御花畑 仁兵衛付

京屋敷 御花畑

大工小屋番 新左衛門五左衛門付

鷹部屋 村岡市太夫付

鷹師 けたき

針奉行 市左衛門

塗師 六右衛門弟子

切符師 与惣右衛門弟子

鉄砲張 善吉 弟子

花作 七郎右衛門

片棒持役差

噌計 川嶋左佐衛門

升取 中川庄右衛門

久保田嘉右衛門

麻犬引

御鷹犬引

御買物丈 藤右衛門 八右衛門

柴渡 佐藤長右衛門

三百人

三百廿三人

二百五十人二人

百七拾人同

二百三十拾人二人半 下女扶持共

二百廿人

百廿人四分老人扶持

百六拾人同

百廿人同

百拾人同

八拾六人

百七拾人二人

百七拾人一人

百五拾人老人

百三拾人老人

御步行 三百人 二人扶持

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

松井頓齋

高野順齋

高畑玄作

川瀬林齋

大藪弥齋

松本宮内

大森伯庵

佐藤竹林

渡辺門齋

植原万歳

勝田千歳

八木宗齋

寺田宗治

小宮山立齋

治齋

梅園佐太夫

高角庄左衛門

浅井三左衛門

坂田角左衛門

内田与左衛門

名村吉左衛門

望月伊太夫

下村半左衛門

田宮九郎右衛門

鈴木武兵衛

高畑新右衛門

杉山奎太夫

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

田坂金太夫

仲野五右衛門

渡辺小兵衛

中川与次兵衛

中川七右衛門

吉田作兵衛

浅井伊右衛門

三輪文右衛門

曾我孫太夫

小寺次左衛門

関野喜兵衛

岡本小左衛門

岸野与惣右衛門

立野五太夫

岡野弥次右衛門

植 市郎兵衛

山崎理左衛門

磯貝新左衛門

大原安左衛門

山田八兵衛

森本安兵衛

門 文兵衛

藤綱弥太夫

西村太郎兵衛

森本六左衛門

深本角右衛門

高柳小兵衛

松井市郎右衛門

柏原忠右衛門

高瀬九右衛門

中根五兵衛

銀高ノ拾壹貫四百目
扶持ノ八拾八人扶持

四百廿五二人扶持

三百五拾五二人扶持

四百五三人

四百五三人

二百八拾五同

三百五四人扶持

二百八十五二人

二百五十五三人

百七拾五二人

銀ノ扶持米ノ

扶持方渡

普請奉行

同

買物処

同

京屋敷

御厩

革細工

疊指

脇

御役者

衣■衣■

地

大

小

川口長兵衛

魚屋善右衛門

下村九右衛門

飯田文左衛門

萩原藤右衛門

本郷作右衛門

中村三太夫

山下次郎右衛門

井階与助

井上忠兵衛

山田治兵衛

藤村与市

黒川左助

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

藤木平左衛門

梅村権七

井上次郎三郎

大谷清三郎

上田太郎兵衛

三田村理右衛門

田中孫兵衛

西村喜兵衛

大岡庄兵衛

梅木子小八郎

藤林伝右衛門

森田庄左衛門

名塚理兵衛

宗徳始三人

なつ

なへ

かか

同同

いと

式石

当町庄屋

安左衛門

同

西天川村

茂左衛門

壺石

大塚村

三右衛門

壺石六斗

当時妹

九郎兵衛

米百五拾三石式升

御領分村々庄屋

庄三郎

但高二四季通り

右之寄

御役知高式万三千四百四拾石

米九千三百五拾六石

御切米

米三千四拾石式斗

但千六百八十九人扶持一人

壺石八斗積り

米都合壺万五千九百七拾式石三斗式升

外二高式拾九石六斗 村々御領

上高

御切符銀合

七拾六ノ三百四拾式分

知行所人数寄

千六百石

壺人

三百石

三人

千石

壺人

式百五十石

二人

五百石

四人

式百卅石

壺人

四百石

二人

二百石

廿七人

百八十石

壺人

百五十石

廿人

百石

六拾四人

六拾石

三人

五拾石

廿五人

ノ百五十人

一 鷲

二居

一 犬

一 御鷹犬

七疋

一 御馬拾四疋

内二疋小荷駄

同御馬拾三疋

内三疋小荷駄

但し、江戸へ下ル

高都合三万八千七百

五拾六石六斗壺升八合

内

三拾五石式升七合 葭嶋替地不足

組分

高槻組 拾壺ヶ村

上郷組 十八ヶ村

冠組 拾七ヶ村

鳥飼組 拾ヶ村

五ヶ庄組 拾四ヶ村

丹波組 拾五ヶ村

ノ六組 八拾式ヶ村

惣人数式万五千七百廿三人

内 男壺万三千三百九拾四人

女 壺万式千三百廿九人

但、千二百三拾四人 男方之御居申候

六千九百七拾式人 男十五より五十五迄之者

家数 四千六百五拾七軒

寺数 百三拾八ヶ村

馬数 七拾八疋

牛数 千四百五疋

右六組村々有之
水籠牛桶合 式千式百九ツ
右同断村々有之
船数大小 百七拾五艘 高槻・上郷・冠・鳥飼

寛文戊年改有之候写者也

本分限帳には、前半部分（「しろあとだより第六号」に、寛文十年（一六七〇）、初代藩主・永井直清時代の家臣の名前・石高・役職などを記されていた。藩士一五四人の名が確認でき、十七世紀後半の家臣団編成や役職名の詳細をみる事ができた。

今回掲載する部分は、藩士（武士）だけでなく、医師・お抱え職人、商人など、当時高槻藩から禄（給料）を与えられていた人びとの名が記されており、職種が多岐に及び興味深い。ここでは、掲載した分限帳からみえる高槻藩の職制について、いくつかの特徴を記す。

まず、職人においては、鉄砲・指物・塗師（漆塗）などの細工職人をはじめ、大工・屋根ふき、左官・木挽などの姿がみえる。特に藩内で火縄銃を製造させるため、鉄砲にかかわる職人が目立つ。

また、江戸時代の將軍や大名が武士の嗜みとして行われた「鷹狩り」は、高槻藩においても同様で、多くの御鷹師が仕えていた。狩りに使用する鷹や鷹犬も把握されている。これらの人びとは、同時期の高槻城絵図（仏日寺蔵）で見ると、城西側の区画・出丸に「鷹匠部や（部屋）」「鷹部屋」に居を構えていたことがわかる。

「花畑」という役を担う人物がいる。江戸時代後期の城絵図にみる弁財天郭の南区画には、「梅林」が確認できるほか、桜の馬場など、城内の植栽を管理する職人がいたことになる。さらに、奥方として御台所方四人や料理人七人も抱えられている。

さて、歩行（かち）・足軽・中間（ちゆうげん）など無高で給金や扶持米支給の藩士も数多くいた。歩行は、徒士とも称され、騎馬を許されぬ軽輩の下級武士にあたる。高槻藩においては、各人に「三百目二人扶持」が与えられ、四十四人を数える。

足軽については、足軽組頭六人・小組頭十六人が確認でき、所属する足軽は、当時、三〇一人を有していた。足軽一人あたり「一石八斗」の禄が与えられていた。そして、足軽らは城下を取り囲むように北や南東・南西に配置され、城北側の足軽長屋に勤務、足軽大将の名をとって長田組・坪井組・和田組・山田組・大嶋組・片岡組・高津組を組織した。続いて、中間は武家奉公人ともいい、一九九人を数え、江戸詰・城内の門番・京屋敷などに配置されていた。

帳面末には、「組分」「人数」など高槻藩の概要を記す。藩の地方統治の組織として、領内を六つの組に分けた。各組は、地方担当藩士によって分担管理され、各組から惣代役が選ばれ、年貢の払いや触書の伝達、取次ぎを行った。藩領の村は、本分限帳で八十二ヶ村を数える。また、当時の藩領内の人口は、二万五千七百二十三人で、家数四千六百五十七軒であったことがわかる。十七世紀後半の貴重なデータとなる。

これまで高槻藩の家老から小役まで家臣団四百人といわれてきたが、本分限帳からみると、藩に抱えられ、禄を支給された人数は多岐にわたり、多様な職制が存在していた。ただ職制の支配関係や家臣団構造など、本分限帳だけでは解明できない部分もあり、今後の課題としたい。



『御当家古分限帳』の藩内組分け・人数書き部分

発行日 二〇一四年三月十六日 編集・発行 高槻市立しろあと歴史館

◆ホームページ：高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内で掲載

http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishu_kanko
<http://rekishu.rekishikan.chosa/shiroato/>